富士山村山口登山道－その歴史的及び文化的意義と古道復活への取組み

Mt. Fuji Old Climbing Route “Murayama-Tozando”

- Our challenge to restore the historical & cultural-valued route after it abandoned 100 years ago

○青木直子、○畠掘操八　（特定非営利活動法人　富士山クラブ）

１．はじめに

富士山クラブは、富士山の自然環境保護活動を行っている市民団体で、今年で 7 年目を迎える。山麓での清掃活動や環境教育プログラムの実施など、多くの市民ボランティアが参加し、実践・啓発活動を推進している。

2005 年春から夏にかけて、数回に分け、会員 40 余名とともに、100 年前に廃れてしまった富士山村山口登山道（以下村山登山道）を歩くプロジェクトを実施した。きっかけは、その 2 年前より、当クラブ会員が地元の方とともに、草木や倒木などで塞がれたなかを、わずかな踏み跡をたどって、一世紀前の登山道を探し出し、再び開通させる道筋をつけたことに始まる。このルートはすでに地元自治体や研究者によって、調査は行われていたが、実際に登山道としてだれもが安全にわかりやすく歩くことは難しかった。昨年までわずか知る人のみが歩いていたこの登山道の歴史的文化的価値をもっとより多くの方に理解と再評価をし、楽しんで歩いてもらえないか、またここを歩く登山者には自然環境をまもることを気に留め、それを実践していただければとも考えた。

そもそも富士山登山といえば、五合目までは簡単に車で行くことができる。シーズン 2 ヶ月間に、20 万人を越える登山者が押しかけ、24 時間以内に登下山するのが一般的だ。手軽に最短で頂上に立つことのみを目的とした登山でなく、山麓から往時の歴史・文化・自然を感じ味わいながらのスロークライミングの試みた。これは地元コミュニティとの交流も含め、富士山を理解し楽しむなかで、富士山の文化資源、自然資源の保護も見据えた一つのプロジェクトでもあった。

２．富士根本宮村山浅間神社（静岡県富士宮市）

「慶長見聞録」の記述に見られるように、開祖である役の行者（えんのぎょうじゃ）をはじめ、多くの修験僧（山伏）が富士山を山岳修行の場として選んだ。平安末期にその中の一人、末代上人が富士山頂に大日寺を、麓の村山に地に興法寺を建て、自ら即身仏となり、「村山修験の祖」として信仰を集めるようになった。こうして富士山信仰（浅間信仰）に仏教色が強くなり、村山修験の拠点として村山浅間神社は今も神仏習合の姿をとどめている。（富士宮市立博物館資料からのまとめ）

村山浅間神社での入山式（7 月 1 日）、大祭（8 月 16 日）、閉山祭（9 月第一日曜日）の行事にもそれが残っている。村山登山道はここが起点だ。

３．村山登山道 - 先人の踏み跡から考察

それでは、村山登山道のルートについてもう少し詳しく述べよう。ここでは、標高 500 メートルの富士根本宮村山浅間神社から 2500 メートルの富士宮口新六合目までの旧ルートを村山古道と呼ぶことにする。

1906 年（明治 39）大宮新道の開通のために廃道になってちょうど 100 年、登山家の私こと畠堀操八と篠原豊さん（両者とも富士山クラブ会員）、および地元村山の鯛津勝良さん、松浦伸夫さんの４人は、２年がかりの計７回入山し、2004 年夏に村山古道を一般の人でも登山できるルートとして復活させた。途中で水の一滴も補給できないし、標識もほとんどない。現在は、木綿製のマーキングが 500 本下げてあるから、ルートファインディングのできるリーダーさえつけば、登山初心者でも問題なく登れるようになっている。

まず 2003 年、村山古道に最初に踏み込んだときの状況を簡単に説明しておこう。

東京事務所　〒105-0013　東京都港区浜松町 2－7－13　2F　TEL:03-5408-1541 FAX:03-5408-1507 E-Mail fctokyo@fujisan.or.jp

標高 1000 メートルまでは民間の植林地になっているため、林道と作業道が錯綜していて本来の古道の判然としないところもある。また地面に日が差し込めば木苺・山椒・椚の木などによる槍襖となっており、登山道に倒し込まれた間伐材が行く手をさえぎっていた。1000 メートルを越えると国有林になるが、こんどの難敵はびっしり生える篠竹、そして前後左右あらゆる方向から折り重なる風損木となった。

村山古道は、戦時中から高度成長期にかけての森林伐採や炭焼きも終わって経済的利用はなくなっていたが、時折は茸採りや密猟者（？）、学術調査隊が上り下りしていたので断続的に踏み跡は残っていた。しかしそれらの踏み跡は密生した篠竹や倒木を避けてつけられていたために、すぐに獣道と区別がつかなくなり、どの方向に踏み込んでもたちまち進退窮まることになった。折れ曲がっているスカイラインの間、標高差 250 メートル距離 1.7 キロを進むのに 7 時間かかったこともある。

標高が 1800 メートルを越えると篠竹は消えるが物凄い光景にぶつかってしまった。見渡す限りの一山を巨大パワーショベルで引っかき回し、全山に逆茂木を植えたような場所に出たのである。1996 年 9 月の 17 号台風の爪痕である。しかしここは日光が地面に差し込むために鴨花などが密生し、浅葱斑、孔雀蝶などの乱舞する楽園にもなっていた。ただ残念なことに、この部分は踏み跡を正確に辿ることは不可能である。倒木の重なりの薄いところを選んで通りすぎるだけであった。

2000 メートルを越えると白檜林になる。ここまで登ると下草もなく、踏み跡もしっかり残っていて、昔の修験道遺跡の石積みが随所に見られるようになる。やがて落葉松・岳樺帯になり、榛の木帯を通り抜けて苔桃の絨毯が広がるガレ場に出ると、目前に新六合の山小屋が見える。

さてこの村山古道を新六合目まで突破したときの驚きの一つに、全コース踏み跡がきちんと残っており、崩落した個所はまったくないという保存の良さが挙げられる。どれだけ篠竹が密生しようが風損木が折り重なろうが、踏み跡は消えていなかったのである。初めはただの藪にしか見えなかったところが、目が慣れてくると見えてくるようになったということもある。そこで歴代、いったい何人くらいの人間が歩けばこのようにしっかりした踏み跡になるのだろうかと、村山古道の登山記録をたどってこれからお話したい。

４．村山古道登山史

まずは富士山の登山記録から村山古道を利用したと思われるものだけを整理してみた。にわか勉強で不十分さは承知の上で時代区分すると、以下のようになる（文献・資料は末尾にまとめてあるので、時代区分の特徴などはそちらから読み取っていただきたい）。

Ⅰ　富士登山伝説の時代
Ⅱ　富士登山の始まり
Ⅲ　村山修験の盛衰
Ⅳ　近代スポーツ登山の始まり
Ⅴ　村山古道の廃道
Ⅵ　村山古道の復活

Ⅰ　伝説の時代というのはまだ富士山頂が噴煙を上げていたころで、噴火と災害を鎮めるために官営の神社（山宮浅間神社、富士山本宮浅間大社）が創設されているが、富士山は遙拝するだけで、登山は自殺行為に等しかったであろう。

Ⅱ　９世紀半ば、都良香の『富士山記』には富士山頂お鉢の実景描写があるので、このころすでに登頂した人がいたと推測できる。獲物を追いかけた猟師が偶発的に山頂まで達するということがあったかもしれない。組織的・系統的な登山は平安末期の末代上人にまで待たなくてはならない。上人は頂上に大日寺を建て、村山の地に興法寺（村山浅間神社）を営んだとされ、「攀登富士山已及数百度」（『本朝世紀』）という。こうした信仰登山の形を整えたのが頼尊の「富士行」といわれる。これは山伏による代参であったようだが、

戦国時代になると山伏（法印）に率いられて道者が登る一般人の登山形式が定着している。16 世紀前半に描かれた浅間大社蔵『富士参詣曼荼羅図』には 237 人の人物が描かれているが、このうち半数が登山者ではないかとみることもできる。

こういったやりかただから、きわめて乱暴な計算であることは承知でいうのだが、平安末期から戦国末期までの 500 年のあいだ毎年 100 人が登ったとすれば、合計が５万人になる。

Ⅲ　村山修験は今川と結びつくことによって隆盛を極めるが、桶狭間で今川が滅んでからは落ち目となり、江戸時代を通じて徳川幕府から冷遇されつづけた。また教義・儀規を堅固に守ったせいもあろうが富士講のような爆発的ブームは呼ばない。ただ先日完成した『村山浅間神社調査報告書』には村山にあった宿坊の名簿から割り出した登山者数が載っている。慶長 17 年（1612）から嘉永元年(1848）までの飛び飛びではあるが 60 年分の実数である。この表を見るとわかるが、富士山が一夜にしてできたといわれる庚申の年、あるいは申年の登山者数は平年の数倍、ばあいによっては 10 倍にも膨れあがっていることである。そこで数字をちょっと加工する。

60 年分のうち申年は８年あり、そのうち宝暦２年は「多数」とあるので外して７年分の平均値を出すと、年間 900 人となる。平年 52 年分のうち「少なし」という表記の３年分を外して 49 年分の平均を出すと年間 290 人になる。それを基に申年１回と平年 11 回の 12 年サイクルを計算すると、１年平均 340 人になる（{900＋290×11}÷12＝340）。ただしこの数字は村山に３つあった大鏡坊・池西坊・辻之坊のうち１坊の記録であるからまず３倍し、このほかに大宮浅間大社宿坊に泊まった登山者もいたはずだからさらに２倍すると、江戸時代を通じて平均毎年 2000 人が登山したということになる（340×３×２＝2040）。つまり 2000×260＝54 万人が江戸時代を通じての村山古道の登山者ということになる。

Ⅳ　幕末になると大名の富士登山（宮津藩松平伯耆守、1852 年）や外国人の登山（英公使オールコック、1860 年）もあってそれまでの信仰登山は変質してくる。明治維新による旅行の自由化、廃仏毀釈による登山と修験道の切り離し、女人禁制の解除は富士登山の動機とスタイルを決定的に変えたようである。オールコックの登った万延元年（1860）の村山の登山者は 8600 人（『袖日記』）、「これ迄女人結界の場所なりしが、今般勝手に登山を許さるるにより、往来の男女陸続として」（『新聞雑誌』1872 年７月号）、「七月一日より同二十日までの登山人員を聞くに、駿河口よりは男二千四百七十一人、女五百三十三人、外国人男二十六人、女八人」（『東京日日』1885 年９月１日）。これも大雑把な見積もりであるが、明治になってからは１年１万人、40 年間として 40 万人が登山したということになる。

ところが村山古道のこの隆盛は突然、断ち切られることになる。

Ⅴ　御殿場線（当初は東海道本線）の開通（1889＝明治 32 年）による御殿場口登山道の開設、中央線と富士急線（当時は鉄道馬車）の開通（1903＝明治 36 年）は、富士宮口登山道関係者に危機感をもたらした。身延線大宮駅（現富士宮駅）の開設を機に、大宮浅間大社から最短距離を登るルートを開いて登山客の吸収を図ったのである。1906 年（明治 39）の夏シーズンから村山古道は廃道になる。

Ⅵ　廃道になってしまったからといって完全に登山が途絶えたわけではない。小島烏水・冠松次郎といった登山家がときおり訪れては啓蒙活動を行っている。昭和 10 年（1935）ごろまでは法印による修験道登山が継続していたらしい。1932 年の台風による風損木の搬出や、戦時中から高度成長期にかけては炭焼きや伐採も盛んに行われたらしい。これらの経済活動によって木馬道や作業道が縦横に造られて、村山古道を損壊あるいは補強している。1970 年、81 年（？）、91 年には学術調査隊が登っている。しかし 96 年９月の 17 号台風は一般の通過・登山をほとんど不

可能にしてしまったようである。この村山古道廃道の時代の利用のされ方については、今後の研究をまたなくてはならない部分が多いが、とりあえず過去100年間で１万人が登ったということにしておこう。

５．登山記録からの推定結果

以上歴代の村山古道登山者を大雑把に推定してみた。それによると平安末期から室町時代５万人、江戸時代 54 万人、明治時代 40 万人、廃道時代に１万人で合計 100 万人となる。登山道の保全については地質や地形、さまざまの要件が絡んでいることはいうまでもないが、およそ 100 万人が踏み固めれば100年間残る踏み跡ができるのではないかというのが、私が感じた疑問への答えである。

村山古道の今後について若干の予想をしておきたい。昨年（2004 年）この村山古道を登ったのは 10 人足らずであった。今年は多く見積もっても 100 人未満であった。しかし、来年は 500 人から 1000 人に増えるだろうというのがわたしの予測である。今年の富士登山者全体 21 万人からすると微々たるものであるが、継続的な人の流れが新たに生まれたことは間違いない。村山古道には残念ながら完全な原生林はほとんど残っていないが、100 年間人間の手から離れた自然と村山修験の遺物が随所に残っている。それらの保護・保全対策は早急に立てる必要がある。多くの方々から知恵と協力を得たいものと考えている。

ほとんど暴論に近い立論を行ったことについてはお詫びしたい。しかしこの作業を通じて、地元民家に埋もれている史料はほとんど手つかずではないかという印象を持った。また、明治以降の資料については意外に簡単に掘り起こせるのではないかという感触をえている。そういった資史料発掘も含めて、大学や博物館など教育機関など専門家や郷土史研究家の方々らの学術的研究が進み、これからもっと正確な議論ができるよう多くの方々にお願いしたいと思う。

６．最後に

近年の古道ブームもあるのか、多くのマスコミで取り上げられ、一般の皆さんの関心の高まりが感じられ、それは当クラブに寄せられる村山登山道復活の反響にも現れている。

村山登山道の歴史や文化的意義についての関心を高めようと、地元村山区のコミュニティでの村山浅間神社からの登山道整備活動（石畳運動）も始まってきた。また当クラブ会員と一緒に、今回は学芸員が同行登山し、さらなる調査・研究も進められている。

一方で、現在の村山登山道では、トイレ設備のない、かなりの距離を歩く。富士山のトイレ問題に３年間取り組んで来た当クラブでは、今回は全員が携帯トイレを持ち歩いたが、今後多くの人が歩くようになれば、登山者のトイレ設備も考える必要がある。また、ルートや歴史的解説の案内板などを含め、登山道の整備・修復を定期的に行うことも必要であろう。

当クラブでは、富士山の自然環境保護活動を行う市民団体として、富士山の今復活した村山登山道の文化資源、自然資源の保護には、地元コミュニティに協力し、関っていくつもりだ。

頂上へ立つことを急ぐ富士登山でなく、1000 年をさかのぼり、歴史的文化的意義を再発見する富士山の登山道として、村山登山道を多くの人が歩むことを期待する。

以上

参考資料①

村山古道登山記録一覧

Ⅰ　富士登山伝説の時代

○聖徳太子、騎馬で富士山に登る（『聖徳太子伝暦』）
○役の小角、富士山に修行する（『日本霊異記』『扶桑略記』）
○『竹取物語』にみる富士山名の由来

Ⅱ　富士登山の始まり

○富士山頂初の実景描写（都良香著『富士山記』）
○村山修験の祖・末代上人、山頂に大日寺を建てる（藤原道憲編『本朝世紀』）
○末代上人、興法寺を建てる（『地蔵菩薩霊験記』『駿河国新風土記』）
○頼尊、富士行を始める（『駿河国新風土記』）

Ⅲ　村山修験の盛衰

○今川氏と村山修験の結びつき（『富士宮市史』『村山浅間神社調査報告書』）
○村山口と道者坊の隆盛（『富士見十三州　富士塚調査報告書』）
○『富士参詣曼荼羅図』に見る登山者
○秀吉、富士山より大木を伐り出す（『武徳編年集成』）
○江戸時代の登山者数（『村山浅間神社調査報告書』『富士山表口「村山」の歴史』）
○村山修験の衰退（『富士見十三州　富士塚調査報告書』『駿河国新風土記』）
○1828 年（文政 11）の登山記（原徳斎『富岳行紀』）
○1852 年（嘉永５）大名の富士登山（『駿州大宮町横関本家　袖日記』）

Ⅳ　近代スポーツ登山の始まり

○オールコック英公使、村山口登山道を登る（『大君の都』）
○1860 年（万延元）の登山者は 8600 人（『駿州大宮町横関本家　袖日記』）
○廃仏毀釈で廃れる？（『読売新聞』2005 年８月 25 日付静岡版）
○女性への富士登山開放（『新聞雑誌』1872＝明治５年７月号）
○明治になって富士登山の活況（『東京日日』1885＝明治 18 年９月１日付）
○1902 年（明治 35）富士登山記念写真（『富士山村山口登山道跡調査報告書』）

Ⅴ　村山古道の廃道

○村山口登山道の廃道（小島烏水「富士山登山の新道」）
○1909 年（明治 42）小島烏水、村山旧道を登山（小島烏水「金剛杖」）
○1928 年（昭和３）中宮八幡堂再建（冠松次郎『富士山の旅』）
○1932 年（昭和７）台風による風損木、王子製紙による搬出（冠松次郎『富士山の旅』）
○1935 年（昭和 10）ごろまで修行者（『岳南朝日新聞』04 年５月２日付）
○1942 年（昭和 17）、冠松次郎登山（冠松次郎『富士山の旅』）
○1948 年（昭和 23）ごろ冠松次郎登山（冠松次郎『富士山の旅』）
○1970 年（昭和 45）ごろ森林垂直分布調査のため登山（鈴木由吉・手塚映男「富士山の森林群落の構造的特性と垂直分布」『富士山』）

Ⅵ　村山古道の復活

○1981 年（昭和 56）富士山本宮浅間大社関係者登る（現地の標柱）
○1991 年（平成３）富士宮市郷土史同好会調査隊登る（『富士山村山口登山道跡調査報告書』）
○古道復活の動き（『朝日新聞』1995 年 07 月 20 日付夕刊）
○1997 年（平成９）中宮八幡堂三たび再建（現地の立て札）
○積雪量調査（現地の設備）
○2003 年（平成 15 年）７月、畠堀操八・篠原豊が村山古道に挑戦（『富士山クラブ通信』11 号、2004 年秋号）
○2003 年（平成 15 年）11 月、鯛津勝良・松浦伸夫が村山古道復活作業に参加（同前）
○2004 年（平成 16）４月 29 日、富士根北公民館主催ツアー75 人が西臼塚駐車場から北根公民館まで下山（『岳南朝日新聞』04 年５月２日付）
○2004 年８月１日、村山古道が富士宮口新六合まで開通する（前掲『富士山クラブ通信』、『朝日新聞静岡版』2004 年９月１日付、『Herald Tribune』10 月 19 日付、畠堀操八『富士山表口・村山口登山道復活への道』、篠原豊『報告書――富士山もうひとつの登山道・村山口』）
○2004 年８月９日、日本美術史研究家が村山古道を登る（高橋真作「復活した富士村山修験道を歩く」『國華　清話会』）
○2004 年 10 月 10 日、静岡県の子育てが終わった主婦らが宝永遊歩道まで登る（ウエブサイト「静岡から花を求めて　のんびり楽しく山歩き」http://usamik.web.infoseek.co.jp/memo16.htm）
○2004 年 12 月３日・６日、遠藤・篠原隊が天照教社から新六合まで登る（前掲、篠原豊『報告書』）
○2005 年（平成 17）４月９日、「富士山完登プロジェクト 2005」登山隊 45 人が田子の浦を出発（『朝日新聞』05 年４月 10 日付静岡版、『静岡新聞』05 年４月 10 日付、『富士市立博物館　博物館だより』№46）
○2005 年５月 22 日「富士山完登プロジェクト 2005」登山隊 45 人が村山浅間神社を出発、西臼塚駐車場に達する（同前『富士市立博物館　博物館だより』、『朝日新聞』05 年５月 23 日付静岡版）
○2005 年７月９～10 日、「富士山完登プロジェクト 2005」登山隊 43 人が西臼塚駐車場から山頂を目指す（『朝日新聞』05 年７月 12 日付静岡版、『静岡新聞』05 年７月 12 日付）
○2005 年８月４日、篠原豊・石川真・前島健治の３人が 24 時間で一気登り達成（『朝日新聞』05 年８月５日付静岡版）
○2005 年の富士山登山者数（『ふじさんネットワーク通信』VOL.37）

資料②発表時のスライドから

今も残る道標

富士山表口真面之図　明治７年村山浅間神社発行

富士根本宮　村山浅間神社

大日堂前（神社内）の富士登山姿の篠縣を着た法師（山伏）と道者や強力たち

山開きの行事　　05 年 7 月 1 日撮影

村山登山道跡（標高 650m）　　04 年 3 月撮影

東京事務所　〒105-0013　東京都港区浜松町 2－7－13　2F　TEL:03-5408-1541 FAX:03-5408-1507 E-Mail fctokyo@fujisan.or.jp

間伐材の捨て場となっていた場所も
（標高 650m）　　04 年 4 月撮影

登山道にある「杭打ち場」となっている大ケヤキの前で、同行の講師の歴史説明を聞く会員ら
（標高 850m）　　05 年 4 月撮影

中宮八幡堂で休む登山者（1902 年当時）ここを過ぎると今のスカイラインに出る（標高 1250m）

スカイライン下部からの登山道入口
知っていないとわかりずらい　（標高 1350m）

苔は村山古道の宝。駿河湾からの上昇気流のため、苔が発達　（標高 1380m）

登山道をふさぐ、1996 年 9 月の台風による大倒木帯１（標高 1850m）　04 年撮影

大倒木帯は地面に陽が差し込むため、夏草が茂る（標高 1900m）　　04 年撮影

登山道をふさぐ、1996 年 9 月の台風による大倒木帯２（標高 1850m）　　04 年撮影

2200mを越えると、シラビソの林の中に、踏み跡がしっかり載っている　　04 年撮影

登山道をふさぐ、1996 年 9 月の台風による大倒木帯３（標高 1950m）　04 年撮影

ガレ場に出ると、新六合目が目前、山頂もよく見える　（標高 2400m）